

図書館
展示

新館長・井上郷子先生 現代譜展示①

「五線譜なんですけど」

2019年6月17日(月)~8月30日(金)

作曲家たちは何のために、どのようなことがしたくて、
このような記譜をしたのだろうか。

図書館は今年度より初の女性館長として、創作の井上郷子先生をお迎えしました。現代音楽ピアノ演奏の第一人者である先生に、これまで演奏された多くの楽曲の中から楽譜をセレクトし、解説をつけていただきました。

7/2(火)には展示されている楽譜を先生が実際に演奏・解説するレクチャーを行います。知られざる現代譜の世界に、ぜひ魅了されてください。

場所：4号館図書館エントランス



普段、私たちが目にする楽譜のほとんどは五線譜であろう。現在、最も普遍的な記譜の仕方が五線譜であるからだ。そもそも目で見えない音や音楽を紙の上に記すために、人々は昔から試行錯誤を重ねてきた。ネウマ譜など今に遺されている楽譜はたいそう美しい。と同時にそこに至った先人の苦勞を思うと畏れも感じる。記譜の歴史を丁寧にたどるのは確かに楽しいことだが、それはまた別の機会に譲りたい。

今回の展示は、通常五線で書かれたピアノ曲の楽譜ではあるが、何か、どこかが、いつも見慣れている楽譜と異なる、そういったものを集めたものだ。すべて20世紀以降の音楽だが、作曲家たちは何のために、どのようなことがしくて、このような記譜をしたのだろうか。その意味について考えてみるのは面白い。(井上郷子)

<関連イベント>

ライブラリー・レクチャー vol. 3

2019年7月2日(火) 18:00~19:00

■展示資料

ヘンデル『メサイア』

Händel, Georg Frideric, 1685-1759

Messiah an oratorio in score

請求記号: S11-327

《メサイア》のスコアは1767年に出版されたが、楽譜上の細かい直しが翌年まで4回行なわれた。その後同じプレートを用い、表紙の語句やデザイン、出版者の変更等を経て1807年までに十数回にわたって出版が続けられた。この楽譜は初版出版者による最後の版だが、正確な出版年は不明である。ヘンデルの肖像画の口絵と予約者リスト付き。この時代に大規模作品のスコアの出版は稀であったが、《メサイア》出版は出版大国であったイギリス人のヘンデルに対する敬愛の念を表している。

ブラームス『四つの歌 op. 96』

Brahms, Johannes, 1833-1897

Vier Lieder für eine Singstimme mit Begleitung des Pianoforte, op. 96

請求記号: S11-063

《死はすがすがしい夜》、《ぼくらはそぞろ歩いた》、《花は仰ぎ見る》、《船路》の4曲。ブラームスの熱烈な讃美者であり、すばらしいピアニストでもあった彫刻家マックス・クリンガーの手になる表紙である。『海』と名付けられ、色は灰色がかかった茶色、クリンガーのサイン「M. K. 86」が右下に見える。クリンガーの別の版画『風景』もくるみ表紙として使われた。世紀末的な幻想世界を顕したこの表紙について、作曲者は画家を仲介した出版者ジムロックとクリンガーに不満を表明している。

ショパン『バラード 第1番 ト短調 op. 23』

Chopin, Frédéric, 1810-1849

Ballade pour le piano

請求記号: S10-510

初版はパリとロンドン、それにライプツィヒから1836年に同時に出版された。この楽譜はライプツィヒ版初版の再版であるが、表紙のデザインが変わり、印刷方法もリトグラフになり、34小節目の右手の第4音が訂正された。“BALLADE”の周りの渦巻き模様、“Pour le Piano”た作曲者名の装飾など、新しい表紙は装飾的である。

羊皮紙に記されたネウマ譜 筆写譜 12 世紀

Parchment manuscript, fragment

請求記号 : S12-776

ネウマの書体や高音表示文字のある赤色譜線つき楽譜であることから、12 世紀後半に北イタリア（ミラノないしはボローニャ周辺）で書かれた聖歌本の一葉と考えられる。テキストは四旬節第 2 週の月曜日のミサ固有文コンムニオに始まり、火曜日、水曜日のミサ固有文（裏面）へと続いている。表面右側には 18 世紀および 19 世紀の筆による 5 種類の書き込みがある。この写本を 10 世紀のものとするその内容には多くの疑問が残るが、18 世紀から関心をよんだ興味深い一葉である。羊皮紙の大きさは縦 27 センチ横 19 センチである。

羊皮紙に記されたネウマ譜 筆写譜 14 世紀

Parchment manuscript, fragment

請求記号 : S11-026

赤色 4 線四角形ネウマ譜によるアンティフォナ集（アンティフォナは聖歌の一種）の一葉で、テキストは復活祭用のもの。おそらく 14 世紀後半にパドヴァ周辺で書かれたと推定される。頭文字 A（Angelus）にはキリストの復活の場面が描かれており、そこにはジョットのフレスコ画の影響が認められる。羊皮紙の大きさは縦 43 センチ横 19 センチ、頭文字 A は縦 70 ミリ横 67 ミリである。

モーツァルト全集 第一部 ピアノ編

Mozart, Wolfgang Amadeus, 1756-1791

Œuvres complètes de Wolfgang Amadeus Mozart

請求記号 : S10-631

18 世紀の後半は音楽史に関する書物が相次いで出版され、それに伴って作曲家の個人全集の出版が始まるが、この全集はその先鞭をつけた出版物である。モーツァルトの死後に開始された曲集は、タイトルに“Œuvres complètes”を置くが、字句どおりの全集ではなく、選集である。3 部にわかれ、第 1 部がピアノ編でピアノ音楽、歌曲、ピアノを伴った室内楽曲の全 17 巻からなる。

縁飾りで飾られた緑色のカバー、当時の一流の画家による口絵、楽曲のインチピット付き内容一覧というデザインは全巻に共通している。第 1 巻は「モーツァルトの墓の前で悲しむ遺児を抱いたコンスタンツェ」であるが、それ以外は、ほとんどギリシャ神話にもとづくネオ・クラシックな図柄である。印刷はブライトコプフ社が発明した可動活字印刷であったが、この印刷方法は当時最も一般的に行なわれた彫版印刷に比べると経費がかかり、もはや時代遅れであった。ブライトコプフ社はこの全集の後、可動活字印刷を捨て、彫版やリトグラフによる印刷方法に転換している。

モーツァルト『ドン・ジョヴァンニ』ヴォーカルスコア

Don Giovanni

Mozart, Wolfgang Amadeus, 1756-1791:

München, Drei Masken, [1922]

請求記号 : S10-935

様々なサイズによる 25 枚のリトグラフ入りの楽譜で、限定 200 部のうちの 36 番目。ピアノ編曲はベルンハルト・パウムガルトナーである。リトグラファーのヘルマン・エバース（1881-1955）は、ライプツィヒ生まれの画家で、ミュンヘン美術学校で学ぶ。トーマス・マンやリルケと親しく交際した。25 の書籍にリトグラフを描いたが、その中でもメーリケの《旅の日のモーツァルト》と並んで、本書は名高い。

展示資料関連図書リストは図書館ホームページでも公開しています。

<https://www.lib.kunitachi.ac.jp/>

2019.6 国立音楽大学附属図書館

